

タウンリーII サイクル劇⁽¹⁾ (I)

橋本 侃

第一演目⁽²⁾ なめし皮組合上演 天地創造⁽⁴⁾

〈写本一頁〉

神ノ名ニオイテ、あーめん。聖まりあが我が助ケニナツテクレルヨウニ初メニ祈リマス！ ウエイクフィール
ド⁽⁵⁾

登場人物 神、ケルビン、善天使一、善天使二、ルチフェル、悪霊一、悪霊二、アダム、エヴァ

(I)

神 わたしハあるふあデアリオおめがデアル。

最初の者にして、最後の者⁽⁶⁾。

玉座にある唯一の神。

もっとも力のある聖威に溢れ、
父と子と聖霊である

三位一体のうちの一つである神。

(2)

わたしに始まりはなく、

わたしの神性に終わりはない。

わたしは玉座にある神、

三人格のうちの一つである神。

この三つは決して混じらない――

わたしには神格だけがあるからだ。

(3)

あらゆるすべてのことをわたしは考えている。

わたしがいなければ何もありえない――

すべてのことがわたしには見えているからだ。

そのすべてをわたしの意思に従って行おう。

これまでに考えてきたことを成し遂げ、

わたしの力で支えよう。

(4)

余の行いの初めに、

広々とした天と地と、

目に美しい光を造る――

そのようにあるのはいいことだからだ。

光と闇を二つに分け、

時間に仕えさせ、時間のうちにあるようにする。

(5)

余は暗闇を夜と、

また、輝く光を昼と、それぞれ呼ぶ。

わたしが口にしたとおりにすべてがあるようにさせよう。

このことは、わたしの意思にしたがって、生じさせよう。

夕べと朝を共に造り、

かくして一日となった。

(6)

余の同意により、中間に水を、

そして、ここで天空を造り、

水を天から分け、
天を水の上に置く。

これで夕べと朝が造られ、

一日となり、これが二日目である。

(7)

広々と広がっている水を

一つのかたまりに集め、

地が乾いて見えるようにする。

乾いているものを陸とし、

水を海とも呼ぼう——

このような作業はわたしにとって楽しいものだ。

(8)

草を地から生えさせ、

木々を茂らせ、果実を産み出させ、

その質^{たち}が明らかになるようにさせよう。

これはわたしの意思に従って成された。

その目論見に従って、夕べと朝が造られ、

一日となり、これが三日目である。

(9)

太陽と月を天に、

恒星と七つの惑星と共に、

その等級に従って、位置させる。

太陽は昼の光に仕えるために、

同じように、月は夜に仕えるために、それぞれ置く。

これを四日目としよう。

(10)

水は泳ぐ魚を養うために、

地は這う毛物を、

空を飛ぶか、地に行くことができる毛物を養うために。

地と水にあって、増えよ、

これでお前たちはわたしの祝福のうちに育つのだ――

これが五日目である。⁽⁸⁾

(11)

ケルビム わたしたちの主、三位一体の神よ、

〈写本左一頁〉

喜びと慈しみがあなたに、

すべてのものの上にあまねく、ありますように祈ります——

あなたが命じられたから造られたのです、

天と地と、この世にあるものすべてを。

そして、決して失うことのない喜びをわたしたちに与えてくださったのですから。

主よ、あなたは力に満ちあふれ、

その力によって、ルチフェルをあなたにも輝くものに造られました。

主よ、わたしたちはあなたを愛しています！ わたしたちも輝いていますが、

あの者のように輝いている者はわたしたちのうちにはいません。

ルチフェル——なるほど、「光輝く者」と呼ばれたものです、

身に帯びるその好ましい光があるからです。

あなたにも好ましく、あなたにも輝いていますので、

あの者のあのような姿かたちを目にするのは大きな喜びです。

主よ、わたしたちはあなたを愛します、

あのような者が無から造られたのだ、ということをお願いながら。

〔ココデ、神ガ玉座カラ去ル。スルト、るちふえるガ代ワツテ座ル。〕

ルチフェル 確かに、好ましい光景だ、

俺たちすべてが輝く天使で

栄光のうちにもこのようにあるのだから。

お前たちが俺様を正しく見るつもりがあるなら、

この威厳こそが俺の身に備わったものだとわかるはずだ。

(13)

俺がことのほか美しく、輝いているから、

この光のすべては、この身から出されているのだ――

この喜びとこのすべての楽しさも。

俺の偉大な力に逆えるものは

誰もいないし、存在するはずもない。

(14)

さあ、俺の姿をよく見ろ。

俺は何千倍も、

太陽がそうであるよりも、輝かしい。

俺の力を口にすることはできない――

何者も俺の力を知らないからだ。

それゆえ、知りたいものだ、天上において、
誰が俺の上に座を占めて当然なのかを。

(15)

俺が栄光の主だから、

この世界のすべてに、

俺の喜びはほとんどのものに及んでいる。

それゆえ、俺の意向はこうだ――

お前たちが俺様を「ご主人様」と呼んでくれることだ。

(16)

そうしたら、直ぐに見せてやろう

俺様が玉座に座るのがいかにふさわしいかを、

栄光の王として。

俺にこそふさわしいのだ、完璧に、

ヤツのがあった場所に俺の玉座を置くのが。

(17)

仲間たちよ、さあ言ってみよ、

三位一体の座に座るのが俺にふさわしいかどうか、

手足はどれもこれもこんなに輝いているので

この座がヤツにはもちろんだが、俺にとってもふさわしいと信じている。

悪天使一 この目にはあなたがとても美しく映るので、

高みに座るのがなるほどふさわしい。

そうなさるのがいい、とわたしには思えます。

善天使一 うぬぼれた自賛は止めにするようにとお勧めします――

その席にふさわしい天使はいないはずだからです、

すべてにおいて、あの方のようには。

善天使二 そんなことを言うのは止めにするように忠告しておく――

無駄話をたたいていただけだと分かるからだ。

ヤツには絶対、今も、これからも、ふさわしいところなど決してない、

すべてを造られた方と同じようには。

悪天使二 さあ、俺にも分かる範囲で判断すれば、

あの方が座るのが当然と思える。

間違いなく、あの方は美しいので、

玉座に座るのが当然だと思える。

それゆえ、仲間よ、口はもう利かなくていいから、

自分で言ったことを思い直してみよ。

あの方がそこに座るのがふさわしいと思える――

そこに座ってれば、神自身と同じように。

ルチフェル 愛しい仲間よ、そのように考えないのか？

悪天使一 そのとおり、神も知っているし、他のヤツもそうだと分かっている。

善天使一 いいや、確かにだ、わたしたちにはそのとおりだとは思えない。

ルチフェル では、何を心配するの、そんな値打ちのないこと(9)を？

こんなにも俺は光り輝いているから、

高く飛び上がってみよう！(10)

〔ココデ、叫ビ声ヲ上ゲテ悪天使タチガ退場スル。悪霊一ガ語ル。〕

悪霊一 ああ、なんと悲しいことか！

ルチフェルよ、このように落ちてしまったのはなぜか？

美しい天使であった俺たちが、

他の天使たちの上、あんなにも高い位置に座っていたのに、

今や石炭のように真っ黒になり、

宮廷の道化のようにぼろを身にまとって、見苦しいかぎりだ。

ルチフェルよ、なんでわざわざ落ちなければならなかったのか？

あんたはすべての天使のうちで一番に美しかったのに――

一番に光り輝き、最高の天使で、そのほとんどの愛を

高みに座る神自身から得ていた。

十あるところをあんたが九まで造った。

悪辣にもあんたは同族から別れてしまったのだ――

それであんたは転落した、それで十分の一になってしまって、

天使から悪の権化になったのだ。

あんたはわれわれに悪辣な意地悪をした。

そのせいで悲しみと苦しみに自分の身を引き渡した。

ああ、なんたることか、他に言うことはない――

今もこれからも、われわれは費えてしまったとしか言いようがない。

(18)

悪霊二 ああ、なんたることか、俺たちが浸っていた喜びを

俺たちが犯した罪のせいで失ってしまった!

ああ、なんたることか、思い上がる気持ちこそともわれらに生まれたとは――

そのせいで俺たちすべてが無に帰した!

俺たちには楽しさと喜びが十分にあった、

ルチフェルが傲慢に身を入れた時には。

ああ、なんたることか、邪悪な傲慢を呪えばいいのか？

そばに立っているあんたたちも皆そうすればいい。

ヤツが嘘を語った場所に一緒にいたので、

俺たちは皆、平和をすべて失った。

ああ、ああ、なんたることだ、俺たちの喜びは失われた――

終わることない痛みに苦しまなくてはならない！

(19)

神 地を這い、地上を歩む毛物たちよ、

生まれなさい、もっと増えなさい。

それがいいことだと承知している。

今こそ、わたしたちの姿に似せて人間を造り、

大小に関わらず、すべてを守らせよう、

鳥と水の中の魚を。「ココデ、鳥ト魚ニ触レル。」

(20)

〔土くれを前に〕 命の霊を体内に吹き込み、

善と悪の両方を知らせてやろう。

〔アダムに向かって〕 さあ、立ち上がって、わたしのそばに立ちなさい。

水にいるものでも陸にいるものでも、すべてのものは

お前の手に委ね、

お前に支配させよう。

(21)

お前に智慧を与え、力を与えよう、

お前の目で見える四方八方のもののためだ。

すばらしく利口にさせておいて、

思いのまま、楽しみと喜びを持てるようにしよう、

気に入ったことをすべて成し遂げ、

天の国で暮らせるように。

(22)

ここをお前の住処とする――

楽しみと慰みでいっぱい
の住処で、

お前をその持ち主にしよう。

一人でいるのは良くない、

このりっぱな住まいの中を歩くのは、

このすべて楽しい喜びのうちでは。

(23)

それゆえ、あばら骨をお前から取り、

それをお前の配偶者とし、

お前の助けとならせよう。

お前たち二人にここにあるものを管理させ、

永久に喜びのうちにあるようにしよう——

わたしの祝福のうちに子孫を増やすのだ。

(24)

この場所で喜びと恵みを与えよう、

自らを罪より引き離すつもりがあるかぎりは——

偽りなく、そのように言うておく。

さあ、立ち上がれ、わたしの天使ケルビムよ！

かれら二人をともに連れて入り、

その楽園の中に、平和のうちに、留めなさい。

〔けるびむがだむノ手ヲ擱ムト、主ガ二人ニ言ウ。〕

(25)

〈左三頁〉

(195)

アダムよ、それにお前の妻のイヴよ、聞きなさい、
お前たちに命の木を禁じる。

さらに、その実を造った者として、わたしは命じる――

気に入ったものは採ってもいいが、その木にだけは近づくな。

アダムよ、もしもわたしの命令どおりにしなければ、

痛ましい死に方をする事になるろう。

ケルビム わたしたちの主、わたしたちの神、あなたの意思が果たされますように。

直ぐにでも、二人を連れてゆきましょう。

わたしの主よ、真実、ぐずぐずしません、

そこへ二人を導き終えるまで。

主よ、あなたに喜んで感謝します、

わたしたちの友だちとなる人間をお造りになった。

さあ、アダムよ、こちらに來なさい、お前を連れてゆこう。

わたしの言うことを良く聞くように――

どのようにお前が造られたかをよく考えておくように、

わたしの主をすべての思いのうちに愛するよう。

主は、その意思によってお前を造った、

天使の階位を充足するために。

神はたくさんのお前おまに与え

生きているものすべての長おさとされた——

禁じているのは一本の木だけだから、

そのようにいつもあるように気をつけなさい。

なぜなら、神の命令を破ったら、

逃れることなく、ただ滅びるだけだ。

ここから楽園に入り、

これからは賢くあるように気をつけ、

元気に暮らすように——もう戻らなくてはならない、

主のところへ、来たところへ。

アダム 全能の主よ、感謝します、

今も、かつても、これからも、

あなたの愛と、あなたの慈しみがそうでありますように——

ここが楽しい場所だからです。

わたしの伴侶のイブよ、この場所をお前はどうか思うか？

エヴァ 喜びと恵みの場所であると思われまます。

神があなたとわたしに与えてくれたものです。

神がとこしえに祝せられますように。

アダム わたしの伴侶のイブよ、そこで待っていてくれ――

もっと他の場所にも行って、

ここにはどんな木々が生えているかを見てみよう。

ここには、これまで目にしたものより、もっと多くのものがある――

草が生え、他にも小さな花が咲いていて、

とてもかぐわしく匂い、色とりどりだ。

エヴァ 喜んで待っています、旦那様――とても楽しいことになるでしょう。

見るものを見たら、戻ってきてください。

アダム でも、いいかイブ、わたしの妻よ、

命の木には近づかないように気をつけろ――

近づいたら、ひどい代価を支払うことになるだろうから。

そうなら、神が言っていたように、わたしたちは注意したほうがいい。

エヴァ さあ、行って、至る所で楽しんでください、

あなたが出掛けている間は、その木には近づかないつもりです――

わたしが気乗りのしないことを信じてください、

神が訳もなく怒るようなことをする気は少しもありません。

ルチフェル このような時をまさか見るとは、誰が考えただろうか？

大いに楽しくやっていた俺たちが

こんなにひどい苦しみをこうむることになろうとは——

こうなるはずと誰が信じていたか？

天には十の階位があつて、

それぞれの階位にそれぞれの序列があり、

十番目の階位にいた連中が俺と一緒に落ちた——

あの時、俺と行動を共にしてくれて、

傲慢な俺を支持してくれたからだ。

だが、仲間たちよ、俺の言うことを聞いてくれ。

俺たちの喜びは永遠に失われてしまった！

神が人間を手造りにし、

あのような恵みを終わりなく持てるようにしてやった。

それは残された天軍九隊の階位を元どおりにするためだ、

俺たちより後に留まった者たちを据えるのだ——それがヤツの意思だ。

奴らは今、楽園にいる。

だが、俺たちのほうがより賢かったら、奴らをそこから追い出してやれるのだ。

〔ここに、第一演目の「天地創造」が終わり、次の演目「アベル殺し」へ続く。〕⁽¹⁾

〔註釈〕

- (1) これまでに筆者はイギリス四大サイクル劇のうちの二つを翻訳している。『チェスター＝サイクル劇』を本誌の九六号(一九八六年十二月)から一一九号(一九九三年十二月)に、『ルーダス・コヴェントリー＝サイクル劇』を本誌の一二二号(一九九七年十二月)から一六〇号(二〇〇七年三月)に、それぞれ掲載した。本号から順次訳出するのは、これも四大サイクル劇の一つである『タウンリー＝サイクル劇』である。イングランド北部のウェストヨークシャー州の東部に位置する州都ウエイクフィールド市に伝わるサイクル劇で、第一演目の「天地創造」から第三演目の「ユダの首吊り」までの全演目が収録してある。この『タウンリー＝サイクル劇』の底本は、マーティン＝ステイヴンとA・C・ローリーとが共編註した『タウンリー劇 (The Towneley Plays, Vols. I (Introduction and Text, S. S. 13) and II (Notes and Glossary, S. S. 14), The Early English Society, Oxford University Press, 1994) (以下「S.C.と表記」)である。ちなみに、A・C・ローリーは既に一九五八年に校訂本 (*The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle*, Manchester) を単独で出版している。
- 本書の翻訳に際しては、今回の底本と同じ英国初期原本協会 (The Early English Society) が出版している旧版 (*The Towneley Plays*, George England ed., with side notes and introductions by A. W. Pollard, EETS, ES 71, London, 1897) (以下「E.P.と表記」) を始め、『ユーター・ハムズの編註書 (*English Mystery Plays*, London, Penguin Books, 1975) と『メイヴィアズ＝メディエヴァルの編註書 (*Medieval Drama*, Boston, 1975) をそれぞれ参照した。
- 本書は他のサイクル劇と同様に、「天地創造」に始まり「最後の審判」で標準的に終わる聖書の記述を題材としているので「聖史劇」とも、一つ一つの物語がそれぞれに展開して物語群全体で完結するので「サイクル劇」とも、上演に関わるのが商工業の同業者組合(キルド)の職人たち (mystery) なので「ミステリー＝サイクル劇」とも呼ばれているものである。このタウンリー＝サイクル劇は興味深いところを二つだけ

挙げると、その一つに、これも四大サイクル劇の一つである『ヨークII サイクル劇』との顕著な類似性が挙げられる。SCの解説(p. xxviii)によれば、「近似性が認められない割合は三十二分の九である」という。劇としての独自性は約二割八分しかないとも解釈でき、地理的状況はひとまず措くとして、二つのサイクル劇のこのような近さは興味深い。

もう一つは、台本の特定の部分を執筆し、このサイクル劇全体を洗練されたものに仕上げたと目される人物がいて、その人物に「ウェイクフールドの劇作家」というあだ名が与えられている。この人物の記述と思われるくだりには、ラテン語が聖職者のように駆使され、聖書はもちろんのこと教父の著作や説教集・聖人伝にも深い造詣があること、中世の民話や伝説、抒情詩やことわざなどにも通じていることを窺わせるところが多く、かなりの文学的知識や才能を持つ人物であると想像される。

最後に、筆者の翻訳姿勢を記しておく。耳で聞いても解かり易い平易な散文体を基本としているが、いくつかの原則を設けた。

① SCの発話の順序と句読点を踏襲したが、違和感を覚える箇所は、日本語の通常の構文を優先させた。当然ながら、そのせいで行数表記が原文のものと合致していない箇所が出た。

② (登場人物・ト書き・台詞などに用いられる英語以外の) ラテン語などの外国語はカタカナ表記とした。

③ 日本語の人称代名詞は文脈が明らかかな場合はほとんどなして済まされる慣例がある。それゆえ、英語の人称代名詞を(例えば、日本語の第一人称を表わす「わたし、わし、おれ、われ」などと)忠実に訳出しなくてはならないとなると、その台詞の調子は勿論のこと、話者の性格にまで影響を与えかねないので、原文を重視しながらも翻訳者の解釈に従って、随時、工夫した。これは二人称代名詞の単数・複数形についても同様で、微妙なニュアンスがみとめられる場合があるが、これも工夫してみた。

④ 中英語以降の伝統を響かせる脚韻の場合と同様に、古英語の伝統を察知できる頭韻法も効果的に多用されているが、音合わせを意図的にする翻訳などには筆者にはおよそ不可能なので、韻や律よりも意味内容を優先させた。

⑤ 註釈は煩瑣になるので最小限度に留めたが、どのように聖書の記述を劇化しているかという点に関心があるので、台本から想像される信仰の深淺程度は度外視して、聖書の記述と大幅に離れる部分に注目した。

(2) 各演目をどのように上演したかの考察は「解説4 上演・舞台」(『中世ウェイクフールド劇集』、イギリス中世演劇研究会編、篠崎書林、

一九八七年、九一二頁)を参照。

- (3) この『タウンリー＝サイクル劇』では、『チェスター＝サイクル劇』と比較すると、当該演目を上演するギルドの名が写本に明記されている場合が極端に少ない。
- (4) 原稿に欠損がある。台本として全部そろっているのが「ルチフェルの転落(六一―一六一行)」と「アダムとイヴの創造(二六五―九五行)」の部分だけである。「天地創造」の第六日目と第七日目の記述が編纂者が写本筆記者のせいである。(Cf. SC, Notes, p. 437.) 欠落しているし、演目の他の部分である「誘惑と人間の転落」と「楽園追放」の欠損も明らかである。二七〇行の欠落が見込まれ、「これは残存する劇と同等の長さで、元々は五〇〇行以上の長さの劇であった」と推測されている。(Cf. SC, Introduction, p. xviii; Notes, p. 437.)
- (5) サイクル名の「タウンリー」は(イングランド北西部のランカシア州のパーンリー市に在住した)原本の最初の所有者の名前による。(Cf. SC, Introduction, p. xv.) 「ウェイクフィールド劇」とも呼ばれているのは上演地の名に由来する。(Cf. SC, Introduction, p. xix-xii.)
- (6) この二行は新約聖書の「ヨハネの黙示録(二二・一二)」から採られたもので、復活したキリストがヨハネに向かって最後の審判について言及するくだりである。このサイクル劇の冒頭が終幕で演じられるキリストの再臨を予表させる仕組みになっている。(Cf. SC, Notes, p. 438.) よって、始まりから終わりまでの聖史をたまた直線的に舞台化したのではなく、円環的に描くことで、文字どおり、「サイクル」として上演するものであることが示唆され、宗教的な意味での「時」の概念を考えさせられる。
- (8) 以下に、第六日目と第七日目の叙述が脱落している。また、六一行から一六一行は編纂者の挿入である。聖書に記述のない「ルチフェルの墜落」は各サイクル劇によってまちまちであるが、「天地創造」の後に来るのが論理的である。(Cf. Note, p. 439.)
- (9) 原文は「ニラネキ」で、比喩的に「価値のないもの」を指すとこの個所が *MED* の例文に挙げられている。(Middle English Dictionary, Sherman M. Kuhn ed., The University of Michigan Press, 1963.)
- (10) 類似性があると註釈(一)でふれた『ヨーク＝サイクル劇』と同じで、神がルチフェルを地獄へ落とさずに、己の選択という行動の結果と、その責任で落ちる。神は沈黙を始終保っている。(SC, Note, p. 440.)
- (11) 劇は不完全のままに終了。旧版を編集した *EP* は十一葉の欠損としているが、*SC* は第二演目「アベル殺し」の前に四葉が欠損している、と

ⓂⓂⓂⓂⓂ (SC, Introduction, p. xv)

【精選文獻表】

- The Towneley Cycle: A Facsimile of Huntington MS HM 1*, with an Introduction by A. C. Cawley & Martin Stevens, Leeds Texts and Monographs: Medieval Drama Facsimiles II, Leeds, 1976.
- Adams, J. Q. ed. *Chief Pre-Shakespearean Dramas*. Boston, 1924.
- Bevington, David ed. *Medieval Drama*. Boston, 1975.
- Cawley, A. C. ed. *The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle*. Manchester, 1958.
- England, George ed. *The Towneley Plays*, with side notes and introductions by A. W. Pollard, EETS, ES 71, London, 1897.
- Happé, Peter ed. *English Mystery Plays*, Penguin Books, London, 1975.
- Manly, J. M. ed. *Specimens of the Pre-Shakespearean Drama*, 2 Vols. Boston, 1897.
- Antilla, Ruino. 'Loan Words as Statistical Measures of Style in the Towneley Play', *Statistical Methods in Linguistics*, II (1963), 73-93.
- Brawer, R. A. 'The Dramatic Function of the Ministry Group in the Towneley Cycle', *CompD*, IV (1970), 166-76.
- Carey, Millicent. *The Wakefield Group in the Towneley Cycle*. Baltimore, 1930.
- Diller, Hans-Jürgen. 'The Craftsmanship of the "Wakefield Master"', *Anglia*, LXXXIII (1965), 271-88.
- Dunn, E. C. 'The Literary Style of the Towneley Play', *ABR*, XX (1969), 481-504.
- Earl, J. W. 'The Shape of Old Testament History in the Towneley Plays', *Studies in Philology*, LXIX (1972), 434-52.
- Gardner, John. *The Construction of the Wakefield Cycle*. Carbondale, Ill. 1974.
- Helmerman, Jeffrey. *Symbolic Action in the Plays of the Wakefield Master*. Athens, Georgia, 1981.

- Martin, J. S. 'History and Paradigm in the Towneley Cycle,' *Medievalia et Humanistica*, N. S. VIII (1978), 125-45.
- Meyers, W. E. *A Figure Given: Typology in the Wakefield Plays*. Pittsburgh, 1969.
- Nelson, Alan. 'The Wakefield Corpus Christi Play, Pageant Procession and Dramatic Cycle,' *RORD*, XIII-XIV (1970-71), 221-33.
- Stevens, Martin. 'The Accuracy of the Towneley Scribe,' *Huntington Library Quarterly*, XXII (1958), 11-9.
- 'Did the Wakefield Master Write a Nine-Line Stanza?' *ComPd*, XV (1981-82), 99-117
- 'Language as Theme in the Wakefield Plays,' *Speculum*, LIII (1977), 100-17.
- 'The Missing parts of the Towneley Cycle,' *Speculum*, XL (1970), 254-65.
- 'The Staging of the Wakefield Plays,' *RORD*, XI (1968), 115-28.
- Williams, Arnold. *The Characterization of Pilate in the Towneley Play*. East Lansing, Michigan, 1950.